

■ 市場は米大統領選というビッグイベント通過を評価！

米大統領選の開票結果は時々刻々と伝わってきてているが、いまだ執筆時点で勝敗の行方は判明していない。執筆時までにトランプ氏とバイデン氏が獲得した選挙人の数では、明らかにバイデン氏の方が勝っているものの、どうやらトランプ氏が選挙結果を法廷闘争に持ち込む可能性は高いと見られ、最終決定までには相当な時間を要すると見ておいた方が良さそうである。

もっとも、勝敗の行方がなかなか判明しないことや、法廷闘争に雪崩れ込む可能性があることなどは以前から想定されてきたことでもある。また、最悪の場合は年明けに下院で大統領を選ぶという2世紀ぶりの混乱が現実のものになる可能性もないではないとされる。

いわゆる合衆国憲法修正12条に基づく決定に委ねられることとなるわけであり、それに備えてペロシ下院議長は今回の下院選挙において議席積み増しを重視してきたと聞く。下院で行われる選挙において米大統領を選ぶのは「改選後」のメンバーだからである。

とまれ、次々に飛び出すトランプ氏の暴言、発言の内容からして、どうやら一筋縄では行きそうもないということは確かなようだ。

もはや、トランプ氏が「〇〇州で提訴」などといった“雑音”には馬鹿々々しくて耳を貸す気にもならない。市場にとってはハタ迷惑であることこの上ないわけであるが、とうにある程度は覚悟していることでもあり、当面は「引き続き警戒を続けながらもいたずらに悲観に傾くことはない」といった基本姿勢で臨むこととなるのだろう。

目下の市場にしてみれば、どっちが次の米大統領になるかより、良かれ悪しかれ「米大統領選というビッグイベントを通過しつつある」ということの方が重要となっており、結果的にNYダウ平均は週初から3営業日で1300ドル超もの上昇を見ている。

その一方で、米株価の好調な推移を受けて日経平均株価も上値余地を一段と拡大する動きとなっている。米・日株価はともに米追加経済対策に対する期待の高まりを“口実”に買い上げられ続けているわけであり、そうした株価の強気展開が市場にリスク選好ムードを漂わせ、その“機械的な反応”として目先はドル売りになびきやすい状況となっている。

そのため、一時は1.1600ドル割れ寸前まで下押したユーロ/ドルも足下では1.1750ドル近辺まで値を戻す展開となっている。これは、言うまでもなく「リスク選好のドル安」がもたらしたものであり、ユーロの上値には自ずと限りがあると見ておく必要があろう。

既知のとおり、欧州の主要な都市では次々にロックダウンが再導入されており、目先は一旦事態が沈静化したようなムードにもなろうが、いずれ再度の景気悪化を如実に示すデータをいやというほど目の当たりにすることとなるのだ。

テクニカルな見地から言っても、目下は21日移動平均線(21日線)や89日移動平均線(89日線)、そして一目均衡表の日足「雲」などといった数々の節目が上値抵抗として意識されや



すい。まして、目下は21日線と89日線のデッド・クロスが久しぶりに示現しかねない状況となっている(左図参照)。さらに、日足の運行線が「雲」を下抜けやしないか見定めることも必要となろう。

目先は多少のブレが生じることもあるが、基本的にユーロ/ドルには戻り売り優先の姿勢で臨みたいと考える。

(11月05日 09:40)